

## 神経内科医としてのシャーロック・ホームズ\* - 神経内科医の視点から見たホームズ物語 - (その1)

古谷博和\*\*

はじめに

シャーロック・ホームズの誕生

「世界で最も読まれているものは聖書であるが、二番目に良く読まれているものはシャーロック・ホームズ物語である」といわれるほど、コナン・ドイル(Sir Arthur Conan Doyle, 1859 - 1930)の創作した名探偵は世界中に広まっている。誰しも小児期や学生時代に一度はこの物語に親しんだものと思われるが、コナン・ドイルが外科医、特に眼科学を専攻しており、その主人公のモデルとして、エディンバラ大学医学部の教授を選んだこと、この名探偵を創作するにあたって、当時の医学的知識、診断技術をふんだんに盛り込んだ事、ドイル自身が感染症に起因する神経学(特に梅毒感染症など)に興味を持ち、その知識を作品の中に取り入れた事はあまり知られていないようである<sup>1)</sup>。

そこで今回、ドイルがワトソンの名前の下で記載した、ホームズの事件簿を、神経内科医の目で検討してみることにした。少年期、青年期に読んだ時と現在再読した時の感想を比較すると、現在はホームズ物語を一種の症例報告として読むことも可能で、以前何気なく読み落としていた部分や、理解できなかった部分、ドイルが行間に込めた考えなどを理解することが出来てなかなか興味深く、現在の視点から見ても有用な点を数多く見いだすことが出来る<sup>2)</sup>。なお、以下本文中の原作および翻訳本からの引用は、文献<sup>3)4)</sup>に基づくものである。また、邦訳の現代名の後ろに原作題名を付記した。

ドイルの自叙伝などを見てみると、彼は貧しい家計の足しにするために早々とエディンバラで開業したものの、なかなか患者はやって来ず、ありあまる暇を持てあましそれまでに興味を持っていた冒険小説、歴史小説などを書いて出版社に送ったものの、判で押したように返送されてきたところ、懸賞小説の応募があり、そこでふと思いだしたものが、恩師の外科医のジョセフ・ベル博士だった(ちなみにドイルは同じくエディンバラ大学医学部の教授をチャレンジャー教授という主人公にして、「失われた世界(The Lost World)」を書いている)<sup>1)</sup>。

ベルといえば、神経内科領域で著明な名前であり、末梢性顔面神経麻痺のベル麻痺、あるいはベル現象を知らない神経内科医はいないと思われるが、このベル博士はチャールズ・ベル博士であり、ドイルの師匠はジョセフ・ベル博士である。しかし、この二人は姻戚関係にあるようで、チャールズ・ベル博士がベル麻痺や、ベル現象を見いだした観察眼はジョセフ・ベル博士にも遺伝しているようで、そのすぐれた観察眼は診察にも生かされ、患者さんの職業、疾患、生活歴などを的中させるさまは、ドイルの回顧録にもありありと記載されている<sup>1)5)6)</sup>。

### <ジョセフ・ベル博士の問診>

「諸君、おわかりの通り、この人が『おはようございます』と言った時、ファイフ州のアクセントに気がついたかね。靴底の隅に赤い粘土が

\* SherelockHolmes as a neurologist. I. (Accepted February 28, 2005)

\*\*Hirokazu FURUYA, M.D., Ph.D.:国立病院機構大牟田病院神経・筋センター神経内科(☎837-0911福岡県大牟田市大字橋1044-1);Department of Neurology, Neuro-Muscular Centre, National Omuta Hospital, Fukuoka 837-0911, Japan

ついているのに気がついたかね. エディンバラ周辺20マイル以内でこのような粘土があるのはこの植物園だけだ..... この人は右手の指が皮膚炎にかかっているが、これはリノリウム工場に特有のものだ。」<sup>1)</sup>

このような優れた問診、診察を目の当たりにしたドイルは、ふと、この臨床的手技を取り入れた探偵がこの世の中に居ればどんなにおもしろいかと考え、一気に書き上げたのかシャーロック・ホームズの第1作である「緋色の研究(A Study in Scarlet)」(1887年)である. この作品は残念ながら懸賞には当選せず、たまたまアメリカで創刊される雑誌のクリスマス特集号に掲載されることになった. 自信を持って送り出した作品だったが、その後たいした反響もなく、ドイル自身もこの作品を忘れかけていたところ、イギリスの雑誌社が目をつけ、依頼されて書いたのが2作目の「四つの署名(The Sign of the Four)」(1890年)であり、その作品の非凡さに気がついた新刊雑誌「ストランド誌(Strand Magazine)」より依頼されて、以後次々とこの雑誌に短編と長編作品を発表するようになり、読者から絶大な賞賛を得ることになった。しかし、ドイル自身は自分を推理小説家とは考えていなかったようで、「探偵小説作家」と呼ばれることに嫌悪感を持っており、人気絶頂の中でシャーロック・ホームズを殺してみたり、引退させている。しかし、読者からの熱狂的な投書や、「死んだホームズをうまく復活させれば賞金を出す」という申し出に、結局1887年から1927年までの40年間に56の短編と、4つの長編、計60編を残すことになった<sup>(1,3)</sup>. (ホームズ物語の時代設定は、1874年から1914年までの40年間に渡る。)ホームズのイメージというと、鳥打帽を被り、天眼鏡を手に、パイプをくゆらせる姿が有名であるが、このイメージはストランド誌に掲載されたドイルの初期作品の挿絵を描いたシドニー・パジェット(Sidney Edward Paget)の作品のイメージが大きく影響している<sup>4)</sup>. (図1)

このようにホームズ物語は絶大な人気を得たため、連載掲載中から何度も舞台劇や映画化、最近ではテレビドラマシリーズ化されてお



図1. シャーロック・ホームズのイメージ

良く描かれるホームズの漫画の一例(a) (<http://www.sherlock-holmes.co.uk/cartoons/cartoons2.html>) と、シドニー・パジェットの描く「ボスコム谷の謎(THE BOSCOMBE VALLEY MYSTERY)」の挿絵に見られるホームズの捜査の様子(b)

り、ホームズのスタイルを追従する探偵シリーズが次々と作られることになった. 例えば、アガサ・クリスティーのポワロシリーズではヘイスティングス大佐がワトソンの役割を果たしている. また、チェスタトンの「ブラウン神父」ものも、



図2 イギリス、グラナダテレビのシャーロック・ホームズテレビシリーズの一場面

ホームズに触発されて創作されている。最近イギリス、グラナダテレビで作成されたホームズシリーズは、残念ながら主役であるジェレミー・ブレッドの病死により全作品の映像化はかなわなかったものの、忠実な原作の映像化、ビクトリア朝時代の風景や、習慣の再現、さらには原作で誤って記載されている部分の訂正などで高い評価を得ている。(図2)

### ホームズ物語と神経学的な時代背景

ホームズ物語が設定された時代は、神経内科学、精神医学の創生期でもあり、表に示したように、神経症候学に名前を残した神経内科学の巨匠がきら星のように名前を連ねている。(表1)

ホームズ物語の時代設定はシャルコーやバビンスキーの時代、さらには系統的精神医学の創始者であるフロイトの時代ともほぼ一致している。神経内科学は当時の最先端の技術でもあったわけで、このような情報に目ざといドリルがそれをホームズ物語に取り入れたとしても不思議ではない。

表1 ホームズの時代に活躍した神経内科、精神科医

---

Charles Bell(Scotland 1774-1842)
Armand Trousseau(French 1801-1867)
Nikolaus Friedreich(German 1825-1882)
Jean M. Charcot(French, 1825-1893)
Howard H. Tooth(UK 1856-1925)
Grigoriy I. Rossolimo(Russian 1860-1928)
Joseph F. Babinski(French 1857-1932)
Charles G. Chaddock(USA, 1861-1936)
Sigmund Freud(Austria 1856-1939)
Pierre Marie(French 1853-1940)

---

### シャーロック・ホームズの診断学

19世紀末の臨床診断学は、臨床検査法や補助診断法が現在のように発達していなかっただけ、問診や全身内科的所見に重点を置いており、その点では現在の神経学的診断法と共通点が多い。多くの作品の中で探偵学の心構えが多く記載されているが、良く読んでみると、それは診断学の心構えとも一致する。このようなものとして有名な作品に、「シルバーストリーズ(白銀号事件)(Silver Blaze)」がある。

(ホームズ)「夜間の犬の奇妙な行動に注意すべきです」

「夜間に犬は何もしませんでした」

(ホームズ)「それが奇妙なことなのです」

(“To the curious incident of the dog in the night-time.” “The dog did nothing in the night time.” “That was the curious incident,” remarked Sherlock Holmes.)

「はて、どうしてそんなものを見落とししたのかな？」

(ホームズ)「僕はこいつを捜していたからこそ見つかったんですよ」

(“I cannot think how I came to overlook it”, said the Inspector, with an expression of annoyance, “It was invisible, buried in the mud. I only saw it because I was looking for it.”)

などというフレーズは、前者はネガティブ徴候(正常、もしくは陰性であることが重要である徴候)の大切さを意味し、後者は論理的診察

を行う上での必須事項、すなわち診察はただやみくもに全身を診るものではなく、良く問診した上で主訴や病歴から病変部位、その性状を予測し、それに準じる所見があるかどうかを神経学的診察で確認するという three step diagnosis の心構えを記載したものとも考えることが出来る。

これに似たものとして、

(ホームズ)「この三日間で起きたただ一つの重要なことというのは、すなわち何事も起こらなかったということだ」(「第二のしみ(The Second Stain)」)

(“Only one important thing has happened in the last three days, and that is that nothing has happened.”)

なども有名である。

また、診察・診断のコツと読み取る事も出来る探偵学の基本についてホームズが語る部分は結構たくさんあり、

(ホームズ)「ぼくは当てずっぽうは決してやらない。あれは癖になると大変だ、推理力が駄目になってしまうからね。君にとって不思議だと思われることも、君が僕の思考の過程を理解しなかったり、重要な推理の基盤になっているごくささいな事実を見落としたりしているからそう見えるだけの話なのさ。」(「四つの署名(The Sign of the Four)」)

(“No, no: I never guess. It is a shocking habit—destructive to the logical faculty. What seems strange to you is only so because you do not follow my train of thought or observe the small facts upon which large inferences may depend.”)

という表現は、「どのような疾患であっても必ず原因がある、その結果としての患者さんの症状を見ると、一見奇妙な原因不明のもののように見えても、それが奇妙に見えるのは我々が原因と結果とのつながりを理解していないからである。」という、臨床診断学の鉄則をホームズが語っているようにも見える。

また、その他にも、

(ホームズ)「視野の広さは僕たちの職業にとって必要不可欠なものの一つだよ。異なった意見を互いにぶつけ合ったり、一見無縁とも思える知識を駆使したりすると、しばしば思いがけないほど興味がわくものなのだ。」(「恐怖の谷(The Valley of Fear)」)

(“ Breadth of view, my dear Mr. Mac, is one of the essentials of our profession. The interplay of ideas and the oblique uses of knowledge are often of extraordinary interest.”)

という言葉は、未知の疾患の病態解明や治療法の発見には決して医学分野や理系の知識だけでなく、文系の知識も駆使して解決にあたらなければならないという警句のようにも見える。

同様の至言は、作品中にいくつも見いだす事が出来る。

(ホームズ)「いついかなる時にも別の可能性という物を考えに入れて、そっちの方の備えもしておくというのが犯罪捜査の基本原則なんだが」(「ブラックピーター(Black Peter)」)

(“One should always look for a possible alternative and provide against it. It is the first rule of criminal investigation.”)

という言葉は、鑑別診断の重要性を示唆しているようにも読める。

(ホームズ)「現場にあった物で問題にしなくて良い物なんてものは一つもないはずだよ」(「ブラックピーター(Black Peter)」)

(“For all that, its presence has some significance.”)

(ホームズ)「案外一番取るに足らない点があるが実は一番重要であるかもしれませんからね。」(「赤い輪(The Red Circle)」)

(“The smallest point may be the most essential.”)

「まるで貴君は診断を下す前にあらゆる容態

を聞き出そうとする外科医のようだ」

(ホームズ)「そして、医者をだまそうともくろむ患者に限って症状のもろもろを隠したがるわけですよ」(「ソア橋(Thor Bridge)」)

(“You’re like a surgeon who wants every symptom before he can give his diagnosis.” “Exactly. That expresses it. And it is only a patient who has an object in deceiving his surgeon who would conceal the facts of his case.”)

(ホームズ)「きみだって患者を診ている時には病例検討に没頭していて、とても料金のことなんか考えてはいないんじゃないのかい」(「赤い輪(The Red Circle)」)

("What, indeed? It is art for art's sake, Watson. I suppose when you doctored you found yourself studying cases without thought of a fee?")

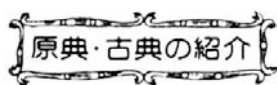
などという言葉は、診察時の医師の心構えを示していると考えても矛盾はしない。

次号で、神経内科疾患と関連のある、ホームズ物語のエピソードについて述べることにする。

## 文 献

- 1) Doyle AC.: *Memories and Adventures*. Kent., United Kingdom: Fangorn Books; 1965. [延原 謙・訳: わが思い出と冒険 -コナン・ドイル自伝-. 新潮文庫. 東京: 新潮社; 1965.]
- 2) Cherington M. Sherlock Holmes: Neurologist? *Neurology* 1987 May; **37(5)**: 824-5.
- 3) Baring-Gould WS. : *The Annotated Sherlock Holmes (2 vols.)*, Edited with an Introduction, *Notes and Bibliography*, New York : Clarkson N. Potter Inc.: 1967. [小池 滋・監訳: シャーロック・ホームズ全集 (全21巻). 東京: 東京図書株式会社; 1983]
- 4) Doyle AC. *The Original illustrated SHERLOCK HOLMES. 37 short stories plus a complete novel*. Illustrated by Sidney Edward Paget. NJ, USA : CASTLE, Book sales Inc. : 1989.
- 5) Westmoreland BF, Key JD. Arthur Conan Doyle, Joseph Bell, and Sherlock Holmes. A neurologic connection. *Arch Neurol.* 1991 Mar; **48(3)**:325-9.
- 6) Reed J. Sherlock Holmes. *Student BMJ* 1999 ; **7** : 127.

\* \* \*



## 神経内科医としてのシャーロック・ホームズ\* - 神経内科医の視点から見たホームズ物語 - (その2)

古谷博和\*\*

### 各 論

次に、ホームズ物語に出てくる、神経内科疾患と関係のある描出について検討してゆくことにしよう。

#### 1. 脳血管障害

ホームズ物語の中で、明らかに脳血管障害に対して言及されているエピソードは2つあり、1つは「グロリア・スコット号事件(The 'Gloria Scott')」で、もう一つは「せむし男(The Crooked Man)」だ。

「グロリア・スコット号事件」は、ホームズ最初の事件とされており、大学時代のホームズが、知人の家に遊びに行き、そこでその推理・観察力を発揮させて知人の父親の過去の経歴を推理し、そのあまりの正確さに驚いた父親から、顧問探偵を始めれば絶対うまくゆくとの勧めを得て、探偵を一生の仕事として選んでゆくことに決定したという挿話である。この時、ホームズの推理で過去を次々と暴かれた知人の父親は、そのショックのあまり、一瞬失神発作を起こしている。また、その父親をゆすりに来た男が、父親の過去を暴いたらしいという、昔の仲間からの暗号文がやってきた時に、父親は卒中発作を起こした。その父親の卒中発作の様子は、

「部屋の中をぐるぐる走り回りだした。僕がやっとソファーに寝かしつけると、口もまぶたも片側に引きつっていて……」

(My father read it, clapped both his hands to his head, and began running round the room in little circles like a man who has been driven

out of his senses. When I at last drew him down on to the sofa, his mouth and eyelids were all puckered on one side, and I saw that he had a stroke.)

と、描出されている。精神的ショックで何度か失神発作を起こしていることや、この老人が心臓病のあることを告白していることなどから、どうもこの老人はもともと心房細動と不整脈を持っており、そのために心原性の塞栓症を起こしたのではないかと考えられる。この時、左右どちらの麻痺だったのかは残念ながら描出されていない。この父親は、友人が至急援助を頼んだホームズが駅に到着するのを迎えに行き、戻ってくるまでの間に亡くなってしまったが、一瞬意識を取り戻したようで、そばにいた医師が、

「日本筆筒の後ろの引き出しに書類が入っているとだけおっしゃいまして……」(「グロリア・スコット号事件(The 'Gloria Scott')」)

(‘Any message for me?’ ‘Only that the papers were in the back drawer of the Japanese cabinet.’)

と、言っている事から考えると、失語は無かったのか、あっても一過性に改善したことが考えられ、右中大脳動脈領域の塞栓か、右中大脳動脈領域であったとしても、塞栓部分に一過性の再灌流が起こったのではないかと考えられる。ただホームズとその友人が戻ってくるまでのおそらく2-3時間の間に死亡していることを考えると、この死因は

\* SherlockHolmes as a neurologist. II. (Accepted February 28, 2005)

\*\*Hirokazu FURUYA, M.D., Ph.D.:国立病院機構大牟田病院神経・筋センター神経内科(☎837-0911福岡県大牟田市大字橋1044-1);Department of Neurology, Neuro-Muscular Centre, National Omuta Hospital, Fukuoka 837-0911, Japan

初発の脳塞栓だけでは説明できず、反対側の塞栓や、脳幹梗塞の再発、不整脈などによる心停止が起こった可能性が最も考えられる。

もう一つ脳血管障害が記載されている症例として、「せむし男(The Crooked Man)」がある。これは、昔、インドで美人の娘さんを取りあつた二人の軍人の一人が汚い手段を使って、もう一人を追い落とした事が、後日暴露されるという話である。結果として、競争者を追い落とした男の前にもう一人が醜い姿(「せむし男」というタイトルの由来になっている)を現した瞬間に、神の鉄槌といふべきか、悪人が突然死を起こした事になっている。

「婦人は悪性の脳炎にかかって一時正気を失っているのだから、彼女からは何も聞き出すことが出来なかった」(「せむし男(The Crooked Man)」)

(No information could be got from the lady herself, who was temporarily insane from an acute attack of brain-fever.)

と書かれているように、婦人は人事不肖に陥り、主人は突然死を起こし、醜い姿の男は犯罪現場から慌てて逃げたため、一種の密室犯罪のような展開になった。

ここで突然死を起こした主人は、生前は全く健康であり、部屋に忍び込んだ「せむし男」の表現によると、この男の顔を見た瞬間に顔貌に死相が現れ、剖検の結果、

「今検死裁判が終わったところですが、死因は間違いなく卒中です」(「せむし男(The Crooked Man)」)

(“The inquest is just over. The medical evidence showed conclusively that death was due to apoplexy.”)

と、述べられている事などから考えると、脳卒中発作の中でも、くも膜下出血を起こしたものではないかと考えられる。恐らく、激しい精神的ショックのあまり、血圧の変化が起こり、脳動脈瘤が破裂したのかもしれない。あるいは、

ショックのあまり転倒した時に頭部を打撲し、二次的に外傷性くも膜下出血を起こしたとも考えられる。

## 2. てんかん発作(突発性異常)

てんかん発作に関する詳細な記述は、「入院患者(The Resident Patient)」に認められる。

これは、泥棒一味が裏切り者の昔の仲間を復讐するために、彼の様子を探り出そうとしてその部屋への忍び込みを企てる挿話である。そのために邪魔となる階下で開業している神経専門医を診察室に釘付けにするため、泥棒一味のボス(てんかん発作のまねをしたのは、窃盗団のボスである)がてんかん発作を装って医師の診察を受けるという設定になっている。

ホームズ物語の中で明らかな神経専門医が登場するという、神経内科医にとっては光栄な一編であるが、その発作については、

「椅子の中で棒のように硬直したまま、全く無表情な、こわばった顔つきで私を見つめているではありませんか」(「入院患者(The Resident Patient)」)

(“I was shocked to see that he was sitting bolt upright in his chair, staring at me with a perfectly blank and rigid face.”)

と、描出されており、医師が症例に興味を持つさまが描かれている(図3)。

この発作様式自体は複雑部分発作のようで、これだけでは本文中に述べられているような、きわめて珍しい疾患とは思われない。しかし、神経専門医をだますほどの窃盗団のボスの医学的知識はかなりのものと考えて良いだろう。ただ、ドアボーイも仲間の一味であり、彼から二階に入院している住人の行動パターンもある程度窃盗団に筒抜けであったことを考えると(二階の住人は病気を装って、これら窃盗団から逃れ、隠れるために入院しているわけで、「入院患者」という表題もここから来ている)、単に二階の部屋の詳しい状況を知るためにこのような複雑な方法をとらなくても良いのではないかと考えるのは、私だけであろうか。



図3 シドニー・パジェットの描く「入院患者 (THE RESIDENT PATIENT)」に出てくるけいれん発作の挿絵

この挿話の中には患者の症状として、「カタプレキシー」という表現がなされており、さらにアミル亜硝酸塩が治療に有効であると述べられている。現在では「カタプレキシー」という用語はナルコレプシーの時に発症する突発性筋緊張低下発作に対して用いられることが殆どで、小児科領域を除いてこのようなてんかん発作には用いないものである。また、亜硝酸アミルは吸入により血管平滑筋を弛緩させ、血管拡張や気管支痙攣を改善させる薬剤で、現在では狭心症に用いられるものの、けいれん発作に用いられることはない。依頼者の医師は、当時としては最先端の技術を駆使していたのであろうが、時代と共に変化していった治療法をしのぶことが出来て、興味深いものである。

また、この挿話の中で、ホームズが、てんかん発作を真似ることは結構簡単なことで、実際に自分も良くやると述べており、現に「ライゲイトの地主(The Reigate Squires)」の挿話の中でホームズはてんかん発作を真似ている。

ホームズは突然恐ろしい顔つきになった。目がつり上がり、顔が苦痛にゆがんだかと思うと、押し殺したようなうめき声とともに前のめりに地面に倒れてしまった。(「ライゲイトの地主(The Reigate Squires)」)

(My poor friend's face had suddenly

assumed the most dreadful expression. His eyes rolled upward, his features writhed in agony, and with a suppressed groan he dropped on his face upon the ground.)

脳波計や 24 時間脳波モニターなどの補助検査装置がなければ、現在でもなかなかこのような詐病やヒステリー発作(転換反応)を鑑別することは困難で、この 100 年間の電気生理学の神経診断学への寄与が良くわかる。

ちなみに、ライゲイトの地主の邦訳部分では、「目がつり上がり」となっているが、原文は”His eyes rolled upward”となっており、「眼球が上転し」の方が正しい訳と思われるし、ホームズがてんかん発作を真似ようとしていた事が良くわかる。

### 3. 神経変性疾患

ホームズ物語の中で神経変性疾患に関する記述は残念ながら殆ど見あたらない。特に当ても多く存在していたであろうと考えられるパーキンソン病に対するそれらしい記述は、見いだされなかった。これは、現在のように平均寿命が高くなかった当時はパーキンソン病の頻度が現在ほど高くなかったのか、当時は加齢に伴う寡動、姿勢反射障害や静止時振戦はあたりまえのもの(少なくとも Doyle は)考えられていたのか、治療薬の無かった当時、重症例はすぐに亡くなってしまっていたために、あまり注目されなかったのかは、はっきりしない。

しかし、不随意運動に対する記載はいくつかあり、特に聖ヴィトス舞踏病(St. Vitus' chorea)という表記が2回認められている。

「彼はしゃべりながら顔を前に突き出すと、唇と瞼が聖ヴィトス舞踏病患者のように絶えずピクピクしていました。」(「ギリシャ語通訳(The Greek Interpreter)」)

(He pushed his face forward as he spoke and his lips and eyelids were continually twitching like a man with St. Vitus's dance.)

「一時は優れた開業医だったが、寄る年波には勝てず、また聖ヴィトス舞踏病のやっかい



な症状に悩まされていたこともあって. . . .」  
 (「株式仲買人(The Stock-broker's Clerk)」)

(Old Mr. Farquhar, from whom I purchased it, had at one time an excellent general practice; but his age, and an affliction of the nature of St. Vitus's dance from which he suffered, had very much thinned it.)

聖ヴィトゥス舞踏病とは、現在では良性の経過をとるシデナム舞踏病(小舞踏病(Sydenham's Chorea))の事を指すので、このようなドイルの描写には違和感がある。しかしこのあたりの事情は、聖ヴィトゥスに関して少し調べてみると理解できる<sup>7)</sup>。

聖ヴィトゥスは4世紀初頭に殉教したシチリア人少年聖人で、7歳又は12歳の頃に異教徒であった父が、当時異端であったキリスト教の棄教を迫ったために、乳母と一緒にイタリア半島南端西部に逃げたものの、そこで捕らえられ、ディオクレティアヌス帝(在位284年～305年)の前に引き出された。この時聖ヴィトゥスは、帝の息子の邪悪な精神による発作(おそらく難治性のでんかん発作と考えられている)を癒すという奇跡を起こしたものの、帝からは妖術と考えられ、ライオン檻の中に投げ込まれるという受難を受けた。しかし、ライオンは決して聖ヴィトゥスに襲いかかろうとはせず、この時の様子が現在でも宗教画に描かれている。このような奇跡を起こしたにもかかわらず、帝は聖ヴィトゥスを許さず、ついには煮えたぎる油の中に投げ込まれて死に至ったものの(西暦303年(?))、この時に嵐が起り、キリスト教以外の寺院を壊したと伝えられている。このことから、聖ヴィトゥスはてんかん病患者の保護聖人とされる。

聖ヴィトゥスの伝承はドイツ、イタリア、フランスなどで広まり、彼の名前にちなんで建設された教会は1300にもものぼったが、ここにもう一つの民間伝承が加わったため、聖ヴィトゥスの名前がさらに広まった。16世紀頃からドイツを中心に彼の祝日(6月15日もしくは28日)に聖ヴィトゥスの銅像の前で踊ると1年間の無病息災が得られるという民間伝承が広まった。この迷信は、教会側がある種のイベントとしてこ

のお祭りを保護したこともあって、だんだんとエスカレートし、踊りは次第に激しくなり、躁病的興奮や舞踏病のように激しく体を動かすようになったため、このような不随意運動を聖ヴィトゥス舞踏病と呼ぶようになったということである。これらの経緯から、聖ヴィトゥス舞踏病という表現には、てんかん発作による強直・間代性の発作や、舞踏病、バリスムスなど多くの不随意運動が含まれていたと考えられる。

以上の経緯から考えると、「ギリシャ語通訳」で記述されている犯人の顔面にあった不随意運動は、顔面痙攣か小舞踏病(Sydenham's Chorea)などに認められる、顔面筋の chorea であったとも考えられるが、話全体の経緯からみると、むしろチックや顔面痙攣と考えた方が良さだろう。一方、「株式仲買人」に描出されている老医師がどのような疾患であったのかを決めるのはなかなか難しい。老人性舞踏病や脳血管障害による片側舞踏病、あるいはジスキネジアのような他の不随意運動ということも考えられるが、優れた開業医がそのために廃業に追い込まれたこと、高齢発症のハンチントン舞踏病の場合は、MRIによる画像診断や遺伝子診断を行わなければ、老人性舞踏病と殆ど区別がつかないこと、アジア人に比較すると欧米人に於けるハンチントン舞踏病の頻度が高いことなどを考えると、彼がハンチントン舞踏病の老年発症の発端者であった可能性も十分に考えられる。

#### 4. 代謝性疾患

変性疾患と同じく、代謝性神経疾患に関する記載も少ないが、「ボスコム谷の謎(The Boscombe Valley Mystery)」に、糖尿病性ニューロパチーと思われる記載がある。

「ゆっくりと足を引きずりながら背中を曲げて歩く姿には. . . .」(「ボスコム谷の謎(The Boscombe Valley Mystery)」)

(His slow, limping step and bowed shoulders gave the appearance of decrepitude, and yet his hard, deep-lined, craggy features, and his enormous limbs showed that he was possessed of unusual strength of body and of character. It was clear to me at a glance that he was in the

grip of some deadly and chronic disease.)

「もう何年も糖尿を患っている。医者に言わせると、あと1ヶ月もつかどうかだそうだ」(「ボスコム谷の謎(The Boscombe Valley Mystery)」)

("I have had diabetes for years. My doctor says it is a question whether I shall live a month.")

残念ながらワトソン博士はこの老人の歩行が垂れ足のようなものだったのかどうかは記載していないが、長期にわたる糖尿病で、血液検査法などの無かった当時、「医者からあと1ヶ月もつかどうかかわからない」と言われているとすれば、明らかに糖尿病性の腎不全やケトアシドーシスなどを合併し、現在であれば透析やインシュリン注射療法が必要な状態であったと考えるのが自然であろう。そのような状態では、ひどい末梢神経障害を合併していたとしても不思議ではない。この老人は、このような状態でも娘のことを思うあまり、旧知の老人を殺すという犯罪を犯し、その経緯を哀れんだホームズは罪を黙認し天寿を全うさせることにしている。

### 5. 脊髄疾患

脊髄性疾患に関しては、「サセックスの吸血鬼(The Sussex Vampire)」にその描出が詳しくなされている。「サセックスの吸血鬼」に関しては、中毒性疾患の項でも述べるが、一晩で急に歩けなくなった犬の症状と、主人公であるジャック少年の症状に関して、以下のような描出がある。

「一種の麻痺なんです。脊髄の髄膜炎と獣医は言っていました。でも峠は越えました。じきに良くなります。」

(ホームズ)「急にこうなったのですか」

「一晩です」(「サセックスの吸血鬼(The Sussex Vampire)」)

("That's what puzzled the vet. A sort of paralysis. Spinal meningitis, he thought. But it is passing. He'll be all right soon -- won't you, Carlo?" "Did it come on suddenly?"

"In a single night.")

少年(ジャッキー少年)は奇妙なよろよろした

足取りで出て行ったが、医者の中から見ればこれは背骨に障害のある証拠であった。(「サセックスの吸血鬼(The Sussex Vampire)」)

(The boy went off with a curious, shambling gait which told my surgical eyes that he was suffering from a weak spine.)

犬と異母弟は、少年からクラレー様の毒のついた槍で刺されたという設定になっている。この毒がクラレーだという謎解きはホームズによってなされているが、クラレー毒では呼吸筋麻痺が起こるものの、犬のような持続性の下肢麻痺が起こる可能性は低いと思われるし、矢じりにつけておいても、長期間経過すれば毒は失活すると考えられる。

ジャッキー少年は生まれた時から歩行障害があったということであるが、ワトソン博士の記述には、「よろよろした奇妙な歩行」としか描かれていない。これでは少年の歩行が痙性だったのか、失調性であったのか、あるいはミオパチーによる動揺性であったのかははっきりしないのだが、幼小児期から症状が認められ、知能はホームズに会った段階で正常(悪巧みをするという点ではそれ以上で、ワトソン博士が書いたホームズ物語も良く読んでいるようである)だとすると、Friedreich 失調症のような遺伝性脊髄性失調症、ポリオ、遺伝性脊髄小脳萎縮症の一部なども鑑別に入るであろう。少年の父親は自分の家系に関してあまり詳細には語っていないが、父親は全く健康で、産みの母親にもそのような症状は無かったようなので、さらには常染色体劣性の疾患や、筋ジストロフィーなども否定は出来ない。

### 6. 中毒(生物毒を含む)

ホームズ物語の性質上、中毒は数多く登場するし、ホームズ物語の中毒学的検討という論文も作成できるくらいに描出も詳しいが、本稿ではその3つについて簡単に記述するにとどめる。(表2)

蛇毒(「まだらの紐(The Speckled Band)」): 蛇がロープを伝って下に降りたり、また登られるかどうかは昔から論議の対象となっているが、ワトソンの描出からはこの蛇はクサリ鎌蛇の一

表 2 ホームズ物語に見られる中毒症

● 蛇毒	「まだらの紐(The Speckled Band)」
● クラーレ毒	「四つの署名(The Sign of the Four)」
	「サセックスの吸血鬼(The Sussex Vampire)」
● アヘン中毒	「唇の曲がった男(The Man with the Twisted Lip)」
	「ウイステリア荘(Wisteria Lodge)」
	「シルバー・ブレイズ(Silver Blaze)」
● コカイン中毒	「四つの署名(The Sign of the Four)」
● アルカロイド毒(トリカブト?)	「金縁の鼻眼鏡(The Golden Pince-Nez)」
● 青酸カリ毒	「覆面の下宿人(The Veiled Lodger)」
	「隠居した絵具師(The Retired Colourman)」
● 脳症を起こす揮発性毒ガス(成分不明)	「悪魔の足(The Devil's Foot)」
● 一酸化炭素中毒	「ギリシャ語通訳(The Greek Interpreter) ?」
	「隠居した絵具師(The Retired Colourman)」
● クラゲ毒(サイアネア・カピラータ)	「ライオンのたてがみ(The Lion's Mane)」

種のものである。すると、蛇毒は神経毒ではなく、ハブやマムシと同じくフォスフォリパーゼ系の血管障害毒ということになるが、それでは最初の犠牲者の姉が、蛇にかまれた後、マッチをすって部屋の様子を見て、さらに部屋の鍵を自分で開けて外に出てきて妹にその様子を語った後、すぐに死んでしまうという経過をとるかどうかが疑問である。(図4)

アヘン中毒(「唇の曲がった男(The Man with the Twisted Lip)」、「ウイステリア荘(Wisteria Lodge)」、「シルバー・ブレイズ(Silver Blaze)」:アヘン中毒患者は当時の社会情勢としてロンドンにも多く、実際の患者に遭遇する機会も多かったようで、患者の瞳孔も含むドイルの記述はかなり正確である。

コカイン中毒(「四つの署名(The Sign of the Four)」:初期作品ではホームズはコカイン中毒であるとはっきりと明示されているのだが、その後そのような描写はなくなっているし、コカイン中毒でホームズがあればほどの活躍が出来るとは信じられないので、これはホームズが真面目なワトソンをからかったという説もある<sup>3)</sup>。

#### おわりに

##### (ホームズ物語が現代に伝える事)

神経内科医の立場から改めてホームズ物語を読み直して感じた事は、物語の中に出てく



図 4 シドニー・パジェットの描く「まだらの紐(THE SPECKLED BAND)」に見られる、蛇にかまれた後の様子(a)と、紐を伝って降りてくる蛇を打ち据えるホームズの挿絵(b)

る人物の行動や、症状の記述が簡明に要約されている事である。これはドイルが決して自分を探偵小説家とは考えず、ホームズ物語が一般受けしたものの、あくまでこれは歴史小説や、冒険小説を書く上での副産物と考えていた事にも関係しているようである。自伝の中にも述べられているが、ドイルはホームズ物語を「本来ならば長編物語となるような話を、ストランド誌編集部への要請によって短編にした」と述べていることから、かなり簡明に書く事に尽力したようである。その結果が逆にうまく作用して、ホームズ物語は(4つの長編を除けば)、比較的短い文章の中に多くの情報が込められている。

また、ホームズ物語は、1. 依頼者の話を良く聞く。2. その話に基づいて事件の発端と結果を結びつける仮説をいくつか考える。その仮説に基づいて、場合によっては依頼者に何度も質問を行う。3. 仮説に基づいて証拠を捜す、という臨床診断学の基本を律儀に踏襲しており、良く書かれた症例報告や、CPC(clinico pathological conference)の記録のような印象を受ける。

いずれにしても、ホームズ物語は時代を超えて、問診、病歴の重要さと、それに基づいて診断の仮説を立て、鑑別診断を頭の中に思い浮かべた上で、診察を行い、仮説の裏付けを行うという臨床診断学の基本をていねいに教えてくれており、臨床検査法に重点を置く現在の医療に警鐘を鳴らすだけでなく、医療の保険診療報酬が大幅に見直され、出来高制から包括医療に移行しつつある今こそ、現代の診療技術に積極的に取り入れてゆく事が望ましい一つの教材として考える事が出来る。

## 文 献

- 7) キリスト教人名辞典. 東京: 日本基督教団出版局; 1986, No 15, p180

### <Abstract>

#### Sherlock Holmes as a Neurologist

by

Hirokazu FURUYA, M.D., Ph.D.

from

Department of Neurology, National Omuta Hospital, Fukuoka 837-0911, Japan

Although tales of Sherlock Holmes are written almost about 100 years ago by Arthur Conan Doyle, there are still many readers in the world. Since Doyle was a medical doctor, he cited many techniques of medical examination by interview or way of diagnosis in those stories, most of them are taught by his senior teacher, Dr. Joseph Bell. We have examined those story, from the stand point view of neurologist, and classified them into several fields. Those are as follows,

1. Technique for medical interview and way of diagnosis;
2. Cardio-Vascular disease
3. Epilepsy
4. Neuro-degenerative disorder
5. Metabolic disorder
6. Spinal cord disorder or myelitis, myelopathy
7. Intoxication

Each of tales contains much truth for medical technique and showed the powers of observation and the deductive approach to neurological problems which is applicable even today.

\* \* \*